

編集の序

本書は玉木 彰先生監修の既刊である『内部障害の症例検討』のシリーズとして企画し、上梓されました。本書は神経理学療法分野でも特に理学療法士がかかわることの多い、脳卒中（脳血管障害）をテーマとしました。最近の脳卒中に関する運動療法は、1990年代後半からのNudo氏、Taub氏らの研究から、中枢神経損傷後の神経機能回復を目的としたニューロリハビリテーションが確立されてきました。また、「脳卒中治療ガイドライン」はアメリカ、日本でも改訂され、装具やロボットの使用、早期からの運動量の充実、課題指向型アプローチなどが推奨されています。しかし、脳卒中の身体的、心理的な症状は多様であり、さらに患者一人ひとりのナラティブな側面、病期や環境によっても違いが生じます。したがって、臨床では症例を通してクリニカルクエストを明確にし、定型化されたPICOに沿ってまとめて検証する症例検討が非常に重要となります。

本書の特徴として、病期を急性期、回復期、生活期の3章に分け、各期において重要となる病態・症状やそれらに対する運動療法を提示した症例報告となっています。急性期では5症例を提示し、リスク管理、早期から座位・立位・歩行を実施するための理論や具体的な方法などをしっかり示していただきました。また、比較的早期に出現するプッシュ症状への対応にも言及しました。回復期は12症例を提示し、回復期のなかで比較的難渋し、多くの理学療法士が問題点としてあげるにもかかわらず、適切なアプローチが十分に明記されていないような症状や徴候などもとり上げました。具体的にはボディ・イメージの再獲得、痙縮の強い人への対応、体幹へのアプローチ、歩行障害、高次脳機能障害、上肢の問題、課題指向型アプローチなどです。生活期では3症例を提示し、身体的なアプローチ、セルフケア、活動・参加に対する理学療法アプローチの要諦を具体的に報告していただきました。各症例報告とも、クリニカルリーズニングを重視し、問題点やプログラムをエビデンスにもとづいて思考した過程を記載していただき、最後にはOutcomeに対して考察を述べていただき、エキスパート達の頭のなかを明確化した内容になっています。

理学療法のなかで、症例検討の重要性は以前より提唱され、臨床実習でも必ず経験してきました。しかし、卒業後はほとんどの理学療法士が症例報告を行うことはなく、一症例を深く掘り下げて考えることが希薄になっていると考えます。本書は、臨床現場で治療の一助とすることはもちろんですが、自分の思考過程の参考にすることや臨床実習の指導や後輩の教育に使える一冊だと確信しています。経験豊かな理学療法士が執筆した20例の症例報告を参考に、EBPT実践のため、本書を役立てていただけたら幸いです。

2019年7月

諸橋 勇